

D-1 妊婦と出生児の栄養に関する諸問題
茨城大教育 ○津田理子 中沢きみ

目的 妊産婦保健の重要性は、最近各方面から認識されるようになり、昭和42年母子保健法が施行されてから、実施面においても、かなりの成果をみているが、実態はかならずしも良好とは云えない。この間の問題を解明するため、われわれは、今回、妊婦の栄養状態が、出生児の発育にどのように影響するかをみる目的で、調査を試みた。

方法 茨城県内の国立・県立2病院の産婦人科に来診した約180名の妊婦（妊娠後期）とその出生児について、才1回は、昭和49年7月より8月の1ヵ月間、才2回は昭和50年4月より5月の1ヵ月間、直接聞きとり方式により調査を行った。項目としては、妊娠中の栄養状態についての意識と摂取状況、並びに分娩後の出生児についての発育状態等である。

結果 妊婦の栄養に対する意識は、いずれの食品群とも、妊娠前より妊娠後多く摂取しているとしておるが、実際の食品摂取量は、妊娠後期の食糧構成基準値に充たなかった。妊婦の血液状態と食品群別摂取量との関係は、ザ-リ- 11.0g/dl 以下の者は、血液状態のよい者に比べて、殆どの食品群の摂取量が少なく、特に緑黄色野菜と魚介類、獣鳥肉類、海藻類では低い値を示していた。なお、出生児の発育状態と妊娠中の栄養状態との関係についても分析を試みた。